

路の辺の 老師の花の いちしろく

人皆知りぬ 我が恋妻を

柿本人麻呂歌集 卷十一・二四八〇

たらしいことが万葉歌などからうかがわれま
す。人目にたつことや
噂されることを避け
るのがマナーだったよ
うです。

毎年秋になると、明

「彼岸花祭り」が開催

日香村のあちろごちら
で鮮やかなヒガンバナ
の花が見られます。そ
の多くが田の畦などに
生えていて、黄金色の
田んぼを真っ赤に縁取
っているかのようです。

された9月22、23日に、
特徴のある美しい花で
私たちの目を楽しませ
てくれました。

ヒガンバナは有毒植
物で、土に穴を掘る小
動物などを避けるため
に植えられていると聞
きます。稲作の伝来と
ともに、中国大陸から
日本に持ち込まれたと
もいわれます。薬とし
ても用いられ、毒の成
分を除いて救荒食にも

「彼岸花」とはよく
名付けたもので、どん
なに天候が不順でも、
毎年お彼岸の頃に咲き
そろうのは見事です。
今年も「飛鳥光の回廊

やまと 万葉がたり

されました。

曼珠沙華という名を

はじめ、たくさんの異
名があることで知ら
れ、一説に「万葉集」

に「老師の花」と詠ま
れたのも今のヒガンバ
ナを指すといわれてい
ます。

この歌では、道はた
に咲くヒガンバナが人
目につくように、恋し
い妻がはつきりと人に

知られてしまったこと
が詠まれています。ヒ

古代日本では、現代

ガンバナは、秋になっ
て茎が伸びて花が咲く
まではまったく存在感
がないのに、花が咲く
ときだけにわかに目立
ちますから、そうした
特徴を踏まえた表現だ
ったのかもしれない

【訳】道のほとりに咲く老師の花のように、はつきりと
人はみんな知ってしまった。私の恋しい妻を。

（県立万葉文化館指導
研究員・井上さやか）
＝原則、隔週掲載

秋の田の 穂田を雁が音 聞けくに

夜のほどろにも 鳴き渡るかも

今年も稲刈りの季節がやってきました。この時期になると、さわやかな秋の朝に、実って垂れた稲穂の輝きを見ながら通勤することができます。私の大好きな季節です。

歌に詠まれた「穂田」とは、実った稲穂が垂れた田んぼのことをいいます。また、「夜のほどろ」とは夜のほどこけた状態という意味で、真夜中の暗闇では

なく明け方近くになってほのかな明るさが感じられる状態をたとえた表現とされます。

この歌では、「秋の田の稲穂を刈る」という意味のことばを冒頭に詠むことで、同じ音を持つ「雁が音」を導いています。

歌の中心は、夜が明けきらないうちに雁が鳴き渡っていくという後半部分にあります。が、先述のような前半

やまと
万葉がたり

(聖武天皇 卷八・一五三九)

部分の情景描写があることで、明け方のまだ暗い時間帯に聞こえてくる雁の鳴き声に重ねて晩秋の田の景色を想起させます。

秋の風物でもある雁は、カリと鳴くことから名付けられたといわれています。「万葉集」には「ぬばたまの夜渡る雁は、おほほしく幾夜を経てか、己が

【訳】秋の穂の出た田を、雁は、まだ暗いのに夜の明けきらないうちにも鳴き渡っていく。

した歌々は「万葉集」に記されて現代にも伝わりました。

盧舎那仏の建立を発願し、いわゆる東大寺の大仏さんを造らせたのも聖武天皇でした。

毎年10月に開催される「正倉院展」で展覧できる御物は、光明皇后が東大寺に奉献した聖武天皇遺愛の品を中核としています。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 原則、隔週掲載

